

- ◎ただいま高速道路を信州に向かっております。天気は快晴、朝日が眩しい。同行の番匠さんと運転を交代しています。番匠さんは登山じゃなく長距離ランの人。入笠山（にゅうがさやま）のマナスル山荘に行きたいとおっしゃる。ならば目的地で別れ、帰りは一緒というコースで行きましょう、と出発した。オレは当初、8月に行った北沢峠を予定していたが、コロナで休館らしく、オーレン小屋を拠点に山を登ろうと考えた。昨日は木下すみちゃんの展覧会で姫路まで遠出した。一昨日は六甲に登った。「六甲はいやだ 人の多い山はいやだ」ぐずっていたが、芦屋川駅から有馬まで、8時出発、2時前到着、へろへろになった、なかなかの山でした。
- ◎今回の山計画、番匠さんに登山口まで送ってもらって、マナスル山荘へは車で行ってもらい、二日後また登山口まで迎えに来てもらうのいいか、オレが番匠さんをマナスル山荘まで送って、それから登山口に行き車を駐車するのがいいか迷った。あれやこれや迷った末、「朝5時に茨木を出発すれば あれやこれやが解決するのでは」という朝が早い彼の意見に従った。
- ◎桜台の駐車場からオーレン小屋まで、コースタイムは1時間半。荷を担いでも2時間強で行けるのではと計算した。荷を軽くするため火を使わず、晩飯は弁当、翌朝と昼の食事は行動のパン類、これらでなんとかかしのぎ、二日目は車に帰り着き、ラーメンをつくれればいいと計画した。
- ◎入笠山と聞いた時、「どこかな？」と調べると、諏訪と戸台の間、この林道は2回通っている。澤山さんと一度、二回目は、衣川さんと、しかも今のアコード車がまだ衣川さん所有だったころ、オレが運転して戸台まで行った。牧場の中を抜け、鉄扉を開け閉めして進んだのを覚えている。
- ◎諏訪南ICで降り、「どっちだ こっちか」と迷っている。我がナビ君、「マナスル山荘」を感知しない。交差点のコンビニで、「三つ目の信号を・・・」と教えられぐるぐる進む。サイトでは、諏訪南ICから50分と載っている、迷ってはあとにこたえると懸命に走ったかいがあり、途中から山荘の案内板がでてきた。サイトで見るとかぎり大きな建物を想像したが、着いてみると昔風の小さな山小屋だった。5時出発のお陰で、10時半には番匠さんを連れてくることできた。
- ◎さていよいよオレのばん、唐沢鉱泉へナビを入れる、2時間で行けるといふ。帰って地図を調べると、諏訪南ICから北がハケ岳の麓のようだ。11時前に山荘を出発、ナビの先導のままに三井の別荘地を抜けると、左側が唐沢鉱泉と書かれた看板がある。そこを右側に進み、未舗装のたがた道、下・中と駐車場があるがもっと上が空いているはずと突き進んだ。週日のわりには車が多い、100台ぐらいは止まっているかな、これが土日ならどうなることやら、10年前は2.3台だけだったような気がするが・・・。
- ◎3:30 オーレン小屋に着いた。テント場代が高い、3000円もした。道の整備の土木作業、経費がかかるだろう、ま、仕方がないが明日は車中泊にしないと・・・。テントを張り、横で寝そべり空を見上げる、まだ陽のある青い空、ほんの少し黄葉、長袖シャツ一枚で快適だ。テントとシラフの荷が重い、1時間半のコースタイムをゆっくりゆっくり歩いた。早いのが陽の高い5時ころに夕食の弁当を食べた。陽が翳りだすと気温がどんどん下がってくる。シャツを2枚、ダウンの上下でシラフに潜り込んだが、夜中は寒かった。これからの季節、カイロが必需品かな、あれも重いけど・・・。
- ◎5時起床。朝食は手造りサンドイッチと水。防寒具を脱ぎ、靴のひもを締め、テントをそのままにして出発。寒い季節は、2.3人の体温が暖かい、古いシラフも暖かくない、なんてぼやきながらもぐっすり寝た。
- ◎5:30 出発。硫黄には道が二つある。昨日のうちに見ておいたが、夏沢峠から行くことにした。もう一つは、“赤岩の頭”経路だけれど、ここは最近赤岳鉱泉から3回通っている。ともに1時間20分。森林の中だけドライトは要らない、十分に明るい。肌寒い、長袖シャツを2枚とヤッケの上着、フードまで被っている。
- ◎尾根までは水路が登山道か、地面は湿っている。樹々の多い森の中、苔が蒼々、横に水がちよろちよろ流れ、幹の白い樹、岩ごろごろ、きれいな森だ。
- ◎尾根に登ってきた、二つ小屋が並んでいるが二つとも閉鎖している、コロナなのかな。「モモンガと ヤマネが屋根裏にいる 小屋」昔からこの看板は見ていたがいつも素通りしていた。

- ◎1 時間で硫黄岳、がんばるべ、と言いながらも疲れが溜まっているのか身体が重い、これじゃ先が思いやられると一步一步である。樹が無くなり岩と土、左側は火山の壁、ジグザグジグザグ高度を稼ぐ。
- ◎背丈より高いケルンが始め、いよいよ山頂だ、だっ広い小さい石ころの山頂、空は曇っているが青い空も見える。まわりのほとんどが雲海だ。四五人の方がおられた。赤い軽石、赤いと言ってもレンガ色の軽石がてっぺんに散らばる。硫黄岳のてっぺんに来ると思い出すのが強風の話。すごい風が火口に向かって吹く、20キロのザックを背負っても飛ばされそう、「今だ」と少しずつ四つん這いで進む、ケルンにつかまり、また、「今だ」で次のケルンに進む、時間をかけ、風のゆるいところに来た時はほっとした。
- ◎山に来て感じる事だけど、身体が疲れ、日常から離れると脳の働きがおおいに低下する。若い頃は探しものばかりしていたが、最近、ザックの中、ポシェットの中、テントの中、一つ一つの物の収納場所を決めている。「あれはどこ さっき在ったのに・・・」「あの書類・・・」山の中では考えることを忘れてひたすら歩く、事故を起こさない、道を間違えない、時間を間違えない、水は、食料は、雨具は、これだけでいいのだ。
- ◎7:45 さあ次は天狗だ、夏沢峠に降りてきた。この辺り“沢”の地名が多いと、こんがらがっていたが、地図の上、左側の西が夏沢鉱泉から夏沢峠、夏沢峠から右側の東が本沢温泉と覚えておこう。
- ◎夏沢峠から箕冠山（みかぶり）までは尾根道ながら樹林帯の少々の登りが続く。だらりだらりの登り、これなら行けそう、元気が出てきた、予定通り硫黄岳と天狗岳が楽しめそう。普段ならどんどん歩いていくのだが、やはり体力が落ちている、無理をすると事故を起こす、ゆっくり行こう。
- ◎箕冠山を超えると、目の前がひらける、樹々が無くなり天狗が見える、手の届きそうなところに峰々が現れる。尾根道を歩きながら景色を楽しむ、空を楽しむ、緑と白っぽい岩肌を楽しむ。
- ◎10 時頃、箕冠山から天狗岳までの道はいいねえ、樹のない尾根道、緑がきれい、濃い緑、黄色い緑、赤い緑、憎いねにくいね・・・。右側も火山の爆裂口、硫黄からずっと続いているとはでっかい火口だ。ニューのあたりにもある。下を見るとシラビソ小屋が見える、横のみどり池も見える、本沢温泉の屋根も見える。噴火のことを帰って調べると、ハヶ岳の火山活動は1万年前には終わっているらしいが、それまでは大規模な噴火が何度もあり、どれがいつの時代のものなのか、わからない部分も多いらしい。
- ◎天狗岳にやってきた、「登ったぜ」こちらは東天狗、隣が西天狗、往復しても1時間ぐらいでやつつけられそうだが、もうここで終わろうかと思案中、いやあ、疲れたが、気持ちがいい、素晴らしい、青空が増えてきた。聞くと向こうがほんまもんの天狗で、6メートル高いらしい。10月がすぐという季節だけれど黄葉はまだだ。
- ◎12時前、天狗から下り、鞍部で休んでいる、何度も言うがいい所だ、樹がない尾根道の上、左右の山肌が下に降りていく、緑と白っぽい岩が筋になって流れる、この景色がアルプスだ。あれれ、曇ってきた、雨でも降りそうな空模様、小屋も近い、車のある登山口も近い、まだまだゆっくり山の中を楽しみたいが、雨はいやだ。
- ◎最近、崖の下りが弱くなっている、三点確保、尻をつく、そんな恰好で降りているが、バランス感覚が弱ってきているね、ゆっくり、確実に降りなくっちゃ。
- ◎根石岳の上から根石岳山荘、なんだか洒落た黒い建物、思い出したが昔はトタン屋根に大きな石をいくつも乗せ、風でトタンが飛ばないようにしていた小屋だったような、横目で見ながら歩いていた記憶がある。後ろを振り返ると、天狗岳に雲がかかってきた、あれれ、すぐに見えなくなった、どうぞ降りませんように。
- ◎箕冠山に帰ってきた、小屋までのコースタイムは30分、これは早すぎる、時間を持て余す・・・。降られると雨具の上下は持っているが、テントが濡れて重くなる、歩きづらい、寒い・・・やだねえ。
- ◎テント場に帰り着いた。上の方だけが雨模様なのかわからないが、天気もちなおしたようだ。水を飲みパンを食べ、テントをたたみ、ザックにパッキング、こんな作業は手慣れたものだ。
- ◎50分のコースタイムを2時間ほどかけ、車のところまで帰ってきた。靴を履き替え下の駐車場で車中泊の用意。ラーメンを作り、ワインを飲んだ。まだ明るいのが11時間行動だった、そらあ、疲れる。翌朝、駐車場のそばでシカの親子が逃げない。車で出発してすぐに、角のあるカモシカを見た、カモシカは10年ぶりだ。

岡田康博著<三内丸山遺跡 復元された東北の縄文大集落>

- ◎一週間前に八ヶ岳付近を車で移動していた、尖石遺跡の付近を通過していた、車を止め山の麓まで歩いた。その時は、縄文人のことなどすっかり忘れていたが、「山の麓から流れる川 川に沿って 縄文人が 山の麓まで 歩いたんじゃないのかな」なんてふと思った。中国大陸から文明が入ってくる以前の日本人は、山を神として崇めていたのではないのかなと思っている。神にちょっとでも近づくためには川に沿って上がっていくのが早道じゃないのかな。
- ◎山の大ベテランのような口を利いて（この漢字だとは知らなかった）申し訳ないが、山の頂に登るには二つの方法がある。一つは川沿いに遡上して、峠とか乗越と呼ばれる部分まで進み、そこから頂上を目指す。もう一つは最初から山の麓の尾根を探し、次の尾根、その次の尾根と進めば頂上に着く。とはいえ、地図があり、先達が道を見つけ、その道を登っているだけのオレとはわけが違う、困難さが違う。とはいえ彼らの頑丈さは、現代の“なよなよ”我々とは違うかな。山野を駆け巡っていた彼らだ。
- ◎八ヶ岳の縄文人は、5000年～4000年前の千年間ぐらい、あのあたりで暮らしていたそうだ。縄文時代が一万年続いたのに比べたった千年だったのかとつぶやくが、千年という歳月はとてつもない、一万年の割なんて考えてはいけない。今から千年前と言えば、平安時代ですぞ。藤原道長が摂政になったのが1016年、大昔のこと、これはもう数字だけの話かもね。
- ◎三内丸山遺跡：5500年～4000年前 1500年ぐらい続いたそうだ。円筒土器文化期の拠点集落跡。現在の陸奥湾から4キロぐらいの場所。縄文以降も、弥生・平安・近代と人が暮らしていたらしい。
- ◎三内丸山遺跡のことがニュースに出ていたころ、オレは、“ふらふらペインティングの旅北海道”（2001年）からの帰り道、青森県の大間港から車で走っていた。“遺跡現場”と書かれた看板を見て入った。学者の先生がいた、「これは 罨の跡 これは・・・」「それぞれ時代が違うけどね・・・」三内丸山遺跡とは違ったが、人が生きていた遺跡の跡を見せてもらった。三内丸山遺跡で、「柱穴の底に太い柱のようなものがある・・・」あの有名なでっかい柱の構造物が見つかったのが1994年だそうで、報道がすごかった。
- ◎酒：縄文時代には酒造りが行われていなかったというのがこれまでの定説だった。一般に狩猟採集民は酒造りを行わず、酒の文化を持っていないと言われている。縄文人も同じ狩猟採集民であることから、酒を持っていないとされていた。弥生時代に入り、酒の原材料である米が伝来したこともあって、縄文時代には酒の原材料も技術もなかったと考えられてきた。ところが、ヤマブドウ・サルナシ・ニワトコ・キイチゴなどの実が、一斉に採集され、利用されていた、これはひょっとして・・・。
- ◎発酵酒を造っていた可能性のシナリオ：種子を土器で煮る。乾燥した実を放り込むと麹菌が繁殖し発酵が行われる。液体を絞り、搾り滓を捨てる。この搾り滓が遺跡から出土しているのでは・・・。遺跡の中からショウジョウバエの蛹がたくさん見つかっている。捨てられた果実類の腐敗発酵がショウジョウバエを集めていることから果実酒が造られていた可能性が高い・・・。ほんのり赤い顔の縄文男女か、泥酔して暴走したか・・・。
- ◎三内丸山遺跡の栗の巨木を使用した大型掘立柱建物：直径1メートル近くもある柱を6本、4M×8Mの平面図。近辺にも直径85センチの柱が発掘されている。
- ◎栗の巨木など見たことがない、栗の木がまっすぐ伸びている姿を見たことがない。鉄道の枕木が栗の木だということを知っていた。おかしな話だと検索してみた。現代は、栗の巨木をほとんど見かけないが、それでも樹齢500年800年というものが存在する。縄文時代ならば、もっとすごいものがあつたはずだ。湿度に、虫に強く腐りにくい、強度と耐久性がある。合掌造りの主要部分にも使用されているらしい。
- ◎六本柱について、現在では、建物説と非建物説（トーテンポールのような）がある。物見やぐら、灯台、祭祀施設などが想定される。三内丸山遺跡には大型掘立柱建物が20棟近く見つかっている。同時に建つたものではない、1500年の時間があるのだから・・・。

野口武彦著<今昔物語いまむかし>

◎今回は経済の話。経済のことはまったく門外漢、というより、永らくの人生でまったく無視してきた事柄、「そんじゃ カネは 欲しくないのか」と聞かれたら、「そらあ カネは 欲しいよ」と答える。経済、世のなかのカネの動きやら回転の仕組み、配分の仕組み、こういうことがまったくわかっていない。カネもうけは下手である、何をどうすれば儲かるのかわからない、まったくわからない故に、もう考えないことにしている。

◎先日の信州、山へ行く車の道中で、元金融マンの番匠さんが、「今は ファンドが・・・」「悪いことをしたら 必ず報いを 受ける・・・」なんて話を面白く聞いていた。金融のど真ん中にいた人ではないと思うが、ひそひそ話、裏話、そんなこんなを見聞きしてこられたのかな。

◎えかきだ、カネが無いのは当たり前だ、と過ごしてきた。まわりには、小金持ちもいれば、金満家もいる。「カネがない もう死ぬしかない・・・」と苦しんでいる人は知りあいにはいない、それとも歯を食いしばっているのかな。たくさんおられる自殺者の中には、「カネ・・・」とつぶやき亡くなった人も多いのでは。

◎野口武彦：大蔵省という官庁は昔から利権が多かったのでは。平安時代の大蔵省は、国庫の財政を預かる中枢の官司である。米穀だけは民部省が管轄するが、調・庸・交易物は大蔵省が収納する。

◎租・庸・調：租は穀物。庸は労働、労役。調は絹、綿、麻。税は時代とともに変わっていった。

◎今昔物語には大蔵官人登場説話が三話ある。財産がらみの話だ。作者はひとりの僧侶という説だが、この方、世間の四方山話をよくまあ知っているねと驚かされる。

◎巻 31 第 5 話「大蔵史生宗岡高助 娘にかしづく語」史生（ししょう）少録で正八位、下級書記官。

宗岡高助は、大蔵省の最下級の書記官で、身のもてなしもひどく賤しげな男であった。ところがびっくりするほど立派な家作持ちだった。近衛大路に面して立派な唐門屋（からもんや）を構えた。屋根には山形で両裾が反転した曲線を描く唐破風を載せ、門は円柱という豪勢な造りだ。東脇に柱間が 7 間ある屋敷に自分は住み、敷地内に綾檜垣をめぐらし 5 間の寝殿を建て二人の娘に住ませた。

高助は娘を大事にするが、ひょこり死んでしまった。高助の兄が財産を独り占めにしたので、娘二人も窮乏し悲嘆のあまり死んでしまった。史生の俸禄では、生計はたつが不動産を購入できるほどの財産は溜まらない。物語では致富手段は語られない。

◎後世の読者から見ると、自分の財力にのぼせ上り、「娘に より いい婿を」と高望みしているうちに頓死してしまい、最愛の娘たちにも不幸をもたらした、男の物語だ。今昔の作者のコメントは、「身分は低くても 気位が高い 財産家だ 財力が無かったらここまで娘の後見はできない 高助ははかり知れない財産家だった」

◎巻 28 第 31 話「大蔵大夫藤原清廉 猫を怖がるる語」大蔵大夫は、六位の官。

藤原清廉は、大和守の下役だった頃、同国の租税を横領してまったく納入しなかったのである。大和守が立腹して詰問しても、ふてぶてしくあだこうだと言い抜け、てんから応じる気色がない。大和守は清廉の猫嫌いを利用して、清廉を猫 5 匹いる部屋に閉じ込めた。大和守は清廉に悲鳴をあげさせ、未納分 500 石を採りたてたという話。清廉は手紙一本で現物を国司役所に納入させる実力を持っていたのだ。

◎巻 28 第 33 話「大蔵大夫紀助延郎党 唇を亀にくわるる語」

亀にキスしようとして亀に唇を噛まれるという他愛もない話だが、財産の作り方を語っている。

紀助延、若い頃から米をひとに貸して、もとの量より多く返してもらっていたから、年月を経るままに、その量が多く積もって 4.5 万石になったので、世人は、紀助延を万石の大夫と名付けた。警護の職務であった彼は、あきたらず、大蔵省に鞍替えし、大蔵大夫まで出世した。

◎今、車を車検に出している。もう古い車なので、二年に一度の車検のたびに、あれやこれやの劣化、脆性疲労、油漏れ・・なんやかんやがあるらしく、「これは 直さないといけません」と整備工の言うがままに、「直さんと いかん やろうね」ということで、なかなかの金食い虫である。50 年も前、運転免許を取得したころは、車の運転するものは、車のボンネットを開け、オイル、ラジエーターの水、そういうものを点検する義務があったのではなかったかな。オレも一人前にボンネットを開け見渡すが、バッテリーやらラジエーターはわかるが・・という状態。今の車はエンジンの様子ががらりと変わって、どこをどう触ったらいいのやられてんてわからない。わからないので、整備工の説明も部品の単語もわからない、「ここが 悪い」「あそこは 悪いけど 早急に ということではない」ま、彼らの説明を鵜呑みにするしかない。見積もりが出て、正式に車検を注文してすぐ電話がかかってきた。「ふたを開けたら ○○が・・部品注文しての 作業になるので、日も伸び 価格も これだけ 追加になります」「えええ あちゃちゃ 仕方がないねえ」という顛末だった。<今回の車検は、終わった時点で合計 12.5 万円也>

◎体はいたって健康だ、と言いたいが、いたってというほど、二三年前のようにはいかない。「だるい しんどい 疲れる・・」オレの身体、たぶん、あれやこれやが始めている、なんやかんやがあるだろうと思うけれど、この二三年、医者門をくぐっていなかった。健康診断やワクチン注射を受けたぐらいかな。歯は四五本欠け、部分ハメケの状態、口から空気が漏れるというが、まさに“フガふが”かな、入歯を作ってもらわなくっちゃ。目は、二三年前から、「新聞が読めない パソコンを 見続け 外を見ると なにがなにやら状態」まわりの人が、「白内障の手術 新レンズはいい」「近くが はっきり 見えるほうが いいのか 遠くが はっきり 見えるほうが いいのか」なんてネットの中でも盛んに話されている。

◎このコロナ禍、「山は 行くぞ」ということで、月 2 回ぐらいのペースで山に登っている。夏の山は虫が多い、足の一箇所アブにでも噛まれたのか、一週間ほど血と汁が出て、「痒い かゆい」この痒みは経験ではほぼ一年続く。それ以外に足のすねの 10 年以上の付き合いの痒み、背中や方が、「あせも？ 虫？・・」と痒い。眼科と皮膚科のあるところが近所に在りいって見た。「白内障は まだ 手術する段階ではありません」いくつかの精巧な写真画面を見ての解説。痒みは、「アレルギーですね・・」どうもこれは花粉症と同じ状態なのか、飲み薬と塗り薬をもらった。これはよく効く。<計 3320 円 高齢者医療費>ハ、メ、マラ、という言葉がある、正式な言葉なのか、昔からのおっさん連の戯言なのかしらない。

◎ハ、メ、マラ：歯・眼・マラ、ジジイになって衰えてくるという言葉だ。マラは摩羅と書く。

◎摩羅：仏語、梵語。善事を妨げる悪神。悟りの妨げとなる煩惱をいう。

◎しばらく前ぐらいから歯と目が気になっていた。歯や目は早急に処理をしないと命にかかわるということではないので、「ま そのうち・・」とずるずる時間が過ぎたが、残りは歯だ。

◎三四日から、安威川はコースを変えている、40 歳代に走っていたコースを走っている。野々宮で自転車を置き、橋を渡って安威川左岸へ、そこから JR のガードの下までを往復する。安威川も上流下流では雰囲気も、空気も、オゾンも違う。昔は汚いどぶ川だったが、最近の安威川の水が透き通っている。透き通るぐらいにきれいだとはいえ、下に溜まった泥や、ヘドロは急には浄化されない、川底をほじくり返せば、汚泥が舞い上がる。普段流れている水はなかなか透明だ。最近の、底浚え、浚渫工事で、中洲が無くなる、草ぼうぼうが無くなる、むくむく育った大きな木に葛が縦横に絡まり、モンスターのような姿だったが、今の安威川はアルプス一万尺の尾根道同様、遮るものがなく、空が、堤防が、堤防の外にある建物が見える。そういえば鳥もなんだか少ない。サギとウ、ハクセキレイとハト、そうだからスもいた。水の中、コイやフナの幼魚か、小型の魚か、水の流れの表面がざわついているが、水の中は見えない。

野口武彦著<今昔物語いまむかし>

◎今回の話は怨霊の話、「くそお あやつめ 恨んでやる 呪い殺してやる・」という話だ。

◎平安時代の政治史は、怨霊跳梁の歴史である。<跳梁跋扈という言葉を思いだした>王朝社会は、皇位をめぐる勢力争いで敗れ、政敵を呪いながら死んでいった人々の怨霊に満ちあふれている。権力闘争が武力行使を伴わず、うわべは平和な手段で、ある意味では陰に籠って行われているから、敗者の恨みも晴れやかに発散しない。現世で報復できない思いが死後怨霊と化して、あの世からしつこく勝者の一族に祟るのである。

◎折口信夫：御霊は、古くは、宮廷及び京師の市民に祟る悪霊の称であって、事実から言えば、神化していない人間の悪執である。普通は“もののけ”である。一家一族のものだが、範囲が広がり、災いが一般人にまで及んだものが、御霊である。

◎御霊というのは、天皇家と京都市民に災いをもたらす悪霊である。私憤が箔をつけ公憤になったもの。

◎巻二十七第十一話「或るところの膳部 義雄伴大納言の霊を見る語」

国中に咳の病が流行して人々みなゴホゴホと病み臥した時のこと、ある家で料理人として働いていた男が夜中に家を出たところ、ひとりの男と行き会った。赤い衣を着て冠を付けていた。身分ありそうな相手なので思わず腰をかがめる。男は尊大な態度で、「俺を知っているか」と尋ねる。「存じません」というと、その男はこういった。俺は昔この国にいた大納言伴義雄というものだ。伊豆の国に配流され、すでにもう死んだ身だ。いまは行疫流行神（ぎょうやくるぎょうしん：流行病の神）になっている。俺は、心にもなく国家に対して罪を犯して、重い罪を被ったけれども、公に使えている間、国から多くの恩を受けている。だから、今年天下に疫病が流行って、国の人みな病んで死ぬはずだったのを、オレが咳病だけで喰いとめてやったのだ。それで世の中に咳病のやむ時が無いのだ。俺はそのことを言い聞かせようとここに立っているのだ。恐れることはない。

◎応天門炎上事件というのがあった。摂関政治の確立を願う藤原良房の犠牲になって、大納言伴義雄は放火犯人として告発され、大逆罪の罪一等を減じて伊豆に流された。二年後配所で怨みをのんで死んだ。

◎伴大納言絵詞（えことば）すごい絵巻物が残っている。

◎日本三大怨霊というものをネットで発見。貴族ばかりで、庶民の話は無いのかな。

◎菅原道真：中流貴族の家に生まれた。幼い頃より神道と呼ばれ、学者、漢詩人、政治家、才能を発揮。官吏登用試験を経て任官。やがて朝廷の最高職といわれる右大臣に就任、藤原氏と並ぶ権力の絶頂期を迎えた。左大臣の藤原時平は、当時の醍醐天皇に、「菅原道真は 天皇を 廃帝する 陰謀を 企てている」と伝えたことにより、道真は太宰府に左遷される。大宰府に幽閉され2年で非業の死を遂げた。その後すぐに藤原時平が、醍醐天皇と皇太子が亡くなり、複数の貴族が落雷で亡くなった。それらを菅原道真の怨霊の祟りと恐れられ、魂を神として祀るべく、北野天満宮が建てられた。

◎平将門：平安中期、関東の豪族。領地問題で叔父たちに襲撃されたが返り討ちしたことで、その武勇が関東に知れ渡り、多くの武士が平将門のもとに集まった。勢いに乗り関東八か国の国府を襲い国史を追放、自らを、「新皇」と名乗り、新国家を樹立した。朝廷はこの行為を反逆とみなし、平将門の追討令が出される。「平将門の乱」と呼ばれ、打ち取られた平将門の首は、京の都の河原に晒されたが、無念の死を遂げた首には、奇妙な出来事がたてつづけに発生、人々は平将門の強い怨念としてこれを恐れた。

◎崇徳天皇：鳥羽天皇の第一皇子で、三歳で崇徳天皇に、十代には崇徳上皇になり、崇徳院と呼ばれる。自分の不当な扱いに不満を募らせていた崇徳上皇は、朝廷の実権を奪い返すため、後白河天皇に戦いを挑みます。保元の乱と呼ばれ、朝廷は後白河天皇方と崇徳上皇方が皇位継承の武力衝突になった。敗れた崇徳上皇は香川県の讃岐に流される。「妖怪に生まれ変わって 無念を晴らす」と死ぬまで、髪と爪を切らなかつた。大火などの事件が続けておこり、後白河法皇の身内も次々亡くなり、強い怨念として恐れられた。

- ◎「比良山に行きましょう」と何人かに誘いをかけたところ、「大仙か 蒜山（ひるぜん）か 氷ノ山（ひょうのせん）に行きたい 紅葉がいいので」「ええ 紅葉・・・」「紅葉が そんなに いいか なあ」とは口に出さず、「いいですね」と答えた。若い頃、澤山さんが、「ああ お花畑 いいねえ」と言っているのを聞いて、「オレのアトリエの方が もっといろいろ 満開じゃ」と小さく悪態をついていた。
- ◎紅葉は「黄色 一色が好きだ」といつも言っている。カラマツが全山黄色く染める、陽の光で金色に煌（きら）めく、そんな中をてくてく歩く、いいですぞ。
- ◎「それじゃ なるべく近い 氷ノ山に しましよるか」という話ができた。一週間前から、「天気は良さそう」と楽しみにしていたが、二日ほど前になって氷ノ山付近の地方に傘マークが出た。そうこうするうちに、近畿の北部、南部に傘マーク、中部は曇りマーク、「あれれ・・・」と思ううちに、傘マークが増えたり、まさかと思ううちに、傘マークが減ったり、ころころ変わる天気予報が続いた。
- ◎これはダメだ、せっかく、5人が行けるというので、午前中の晴れている間に、ポンポン山に登り、足を痛めている三宅さんを訪問しようかと決めた。朝の6:30に家を出て、みなさんを乗せ、高槻に向かった。「手前の駐車場で いいですか」「いやもっと上の 本山寺の駐車場が いい」せっかくの山なのに、ちょっとでも距離が短いほうがいいという方がおられ、本山寺の駐車場まで乗りつけた。500円を前払いして、駐車券をフロントガラスの見えるところに置いてください。去年ぐらいから、下の神峯山寺も上の本山寺も、このシステムを取るようになってきたようだ。
- ◎天狗杉のところまでやってきた。このでっかい杉は、とはいえ普通のスギの倍ぐらい、写真でしか見たことがない縄文杉などに比べたら、子どものようなもの。樹齢は300年か400年ぐらいじゃないのかね。スギ君には失礼なことを言いましたが、天空を駆けめぐる天狗にとっては格好の休憩場所だったとか。しめ縄が巻かれ祠がある。そのすぐそばのスギの植林群が10本20本先年の台風でなぎ倒され、まわりは空がまる見えだけど、スギ林が倒れる前は薄暗い空間だったように思われる。
- ◎二日前に、雨模様とわかった時点で、午前中に小さい山を、ポンポン山がいいか、愛宕山にしようか、迷ったがいちばん近場のポンポン山に決めた。山仲間の三宅さん、山で歩いている時に、「いてて あれれ」足の裏のどこかの骨がやられたらしい。その場で湿布薬を貼ったが、だんだん腫れてきた。レントゲンでは、「骨は異常なし そのうちに治るでしょう」安心していたら、次のMRIで、「骨が折れてる 完治に3か月ほどかかる」ということだけれど、薬や治療はなく、そのまま3か月もすれば、治るだろうということらしい。
- ◎三日ほど前から急に寒くなってきた。「10月中旬 運動会のシーズンは まだまだ暑いね 夏だねえ 屋間外に 出られないねえ」というような日が続いていたが、その日から暑さが一転した。半袖のTシャツ1枚から、長袖のシャツにフリースの上着を着てもまだ寒い。気象予報士がいうには、「夏日から急に冬が来た 9月の気候が 10月を飛び越え 11月がやってきた」
- ◎今日はそんなに寒くない、長袖シャツ一枚で歩いている、暑くもない寒くもないちょうどいい。「アレエ なんでもスギの樹 枯れてるの・・・」20本30本と枯れ、枝だけになっている。反対側のスギ群は青々している、なんで枯れたのかな。針葉樹の森は薄暗く鬱陶しい、なんて文句を言ってはいけないね。
- ◎ポンポン山のとっぺんは、678.9Mだという。この数字はどうして出すのかな。150年前に東京湾の海面を6年間かけて標高ゼロメートルを決め、「日本水準原点」を作った。次に各地方の道路、1.7万点の場所の高さが正確に求めた。山の高さを測るのは三角点を山頂近くの見晴らしのいいところに置き、三角測量で高さを決めてきた。三角点は麓から見える場所でないといけなく、測れない。山の標高は三角点のある場所の高さのことで、とっぺんではないのだ、これは知らなかった。現在では人口衛星からの測定だそうです。
- ◎近所の低い山だとはいえ、2時間3時間緑の中、土と石との道、山の中に入ると気持ちがいい。空気が美味しい、目に優しい、思考が停止する、いいことづくめである。こんないいことを・・・というけれど、なかなか皆さん山には付き合ってくれない。「歳をとると ひとりで 山に入っては アカンよ」「発見が遅れるよ」

- ◎9:00 湖西線北小松駅から歩き始めた。「明日行こうか 明後日にしようか」寝る前から思案しながら用意だけはしていた。ちょうど6時過ぎに目覚めた。「よいし行こう 7:43 JR 茨木駅発の 電車に乗れば 9時に JR 湖西線北小松駅 に着く」「四日前の ポンポン山が あまりにも 消化不良」「今日は 楽しむぜ」
- ◎いい天気だ、白い雲が半分もない青空だ。電車賃 1170 円 駐輪場 100 円 2500 円 足らず。電車は京都駅から空いてきた、左側の席に腰掛けた、車窓から比良山系が見えだした、遮るものがなく緑の山がまる見えである。こんなに山全部が見えるのもめずらしい。特徴のある琵琶湖バレーの建物がよく見える、奥の方が金糞峠、「あれ ひょっとして アンテナの塔・・・」山に陽が当たり、緑みどりの山並み、雲の影がその緑みどりに不思議な模様を、何か生き物のような山肌に見せている。比良はたかだか標高千メートル少しの山だが、登り口の標高は 100 メートル 足らず、エンヤコラ、千メートルの登りだ。
- ◎駅から 1 時間ちょっとで“涼峠”にやってきた。北小松駅から比良駅までの道は、もう何年も通っている、オレの定点かな。何年か前までは北平峠から武奈ヶ岳、金糞峠を経由していた、まったく元気いっぱいだった。この何年かは経由ができなくなっている。ただ、釈迦と北比良峠の間に、崩れかけているところがある、あれが崩れてしまえば通れない、どなたか直してくれないかな。
- ◎ヤケ山を通過、風がきつい、空の上、ビュンビュン吹いている。右に行くとも寒風峠となっている、昔行ったことがあるはずだが忘れてた。ヤケ山からヤケオ山を通過して釈迦岳まで 2 時間がこのルートのハイライトであり、なかなかにしんどい登り。積雪期、何度か断念して引き返した。今回は途中で道を間違え、青テープが着いているルートをしばらく歩いてしまった。青テープはどこかに行く道だと思うが、(帰って調べると、北西に向かって 582 地点を通過、黒谷に降りるようだ。) 15 分ほど行って、「おかしい これは違う」と引き返したら何のことはないもう一つの道がある。「ぼ～っとして るんじゃ ないよ」である。
- ◎樹々が低くなり、左側はすくと落ちて琵琶湖がまる見えだ。崖崩れの所もある。昔、積雪期に左側からザイルを背負って登ってきた人がいたのには驚いた。きつい勾配、エンヤコラどっこいしょ、歳だねえ、なんて言いながら登っていく。
- ◎1 時前に釈迦岳を出発、アンテナ塔、電波塔の横を抜けて北比良峠に向かう。駅のトイレ前で会釈をした方、登山口で登山届を出して振り向くと後ろを歩いてくる方、鈴峠で写真を撮っているとまた会った。「遅いですが ゆっくりですが 前後して登りましょう」「よろしくです チョコどうぞ」「ありがとう」なんて会話を交わし、オレが写真を撮っていると前を歩いて行った。ヤケ山ではだれもいなかった。迷ってまた道に戻り崖の縁でまた会った。「ここが絶景ポイント ここ 好きなんです」「じゃあ ここで弁当 一緒にしましょう」なんてなことで知り合った。
- ◎風はビュンビュン吹いていたが、釈迦岳に近づくと収まってきた、穏やかに普通になってきた。風のきつい一時間は、風の通り道かもしれない、冬に雪と風で引き返したことがあったが、もう少し我慢すればよかったかもしれないね。
- ◎先ほどの彼女“のりこさん”とおっしゃる。京都に彼氏がおり、今日はそこから比良に来た、来週は石槌に登る、危ないところが好きだという。秋の地震の時に穂高を歩いていたが、落石で怖かった。「還暦過ぎですが同じくらい・・・」「とんでもない まもなく 75 歳です・・・」がはは、15 歳も若く、見られたぞ。
- ◎北比良峠まで来た、あとは下るだけ、ただ電車なので駅までの 1 時間の歩きが残っている、これがしんどい時間だ。北小松から北比良までは普段、ほとんど人と会わない。今日は 10 人ぐらいと会った。
- ◎登山が好きの人の中ではオレの恐がりも困ったものだが、岩が好き、垂直の壁を見るとぞくぞくする、沢登も好き、そういう人たちもまわりに何人かいる。とび職も怖がっているは務まらないと思うが、天性の高所平気性の人が、高い危険なところで活動するのは もってこいの天職だね。
- ◎川まで来た。下りは面白くないね。登りは、「もうすぐ 空が近づいてきた てっぺんが・・・」と楽しむが、下りはくだるだけだ、下を見て、地面を確かめて、ひたすら足を降ろすだけ、つまらんね。



小林安治著<平安京の仰天逸話：エピソード>

◎仰天という見出しに、「ほう どんなすごいことが・・・」と期待したが、「何だ 知ってること ばっかじゃ」なんてほざいている。目についたのが、今昔物語集に載っていた話に似た話が出てきた。古今著聞集という説話集の存在は知らなかった。鎌倉時代の説話集らしい。今昔物語集は、宇治拾遺物語とは 81 編、古本説話集とは 31 編、と共通の話が載っている、中には字句まで似ているものもあるという。想像するに、平安時代という大昔、何か事件や災害が起きると、人々の口から口へ噂話、伝承話が流れ流れ、それを聞いた作者がその話ヒントを得て、自作の説話を編集したのではないのかな。

◎今昔物語集：巻二十九第三話<謎の女盗賊>この話はいたく気に入っている。この事件の噂話、今でいうならニュースを聞き、作者は見事な小説風説話に仕上げている。もちろんオレが読んだのは現代語訳、活字になっているとはいえ古文のママは読みづらい、まして写本とはいえ、毛筆で書かれた達筆はまったく読めない。

◎古今著聞集：大邸宅を群盗が襲った。大邸宅に仕えていた侍の中に腕の立つ者がいた。押し入った群盗全員を打ち負かすことは無理なので、彼らに交じって、盗品を分けるところまで付いていき、強盗どもの顔を覚え、主だった奴を尾行し、住処を突き止めてやろうとした。

群盗どもの中に、かくべつ物腰が優雅で物言いも品がよく、歳は二十四、五ぐらいに見える若者がいた。

胴腹巻（武具）をして左右に籠手を当て長刀を持っていた。裾に緋色（スカーレット：オレンジがかった赤色）の括り緒のついた指貫袴（さしぬき：裾を紐でくくったニッカポッカ風かな）を足高にくくっていた。群盗の首領とおぼしくて、みながこのものの指図に従っていた。

◎今昔物語集：歳は三十ぐらいですらりとした背格好の侍が歩いていた。女が手招きして、「あがれという」<大略>男は女と、二、三年いっしょにいましたが、「そういうことだったのか」とは最後までわからないままでした。ただ一度だけ、仲間が集まっているところから少し離れて立っていた者に、他のものが畏れ敬うようにしていましたが、松明の灯影に透かして見えた姿は、男の顔色とは思えないほどにたいそう白く美しく、その目鼻立ちや面差しが我が妻としていた女と似ているように見えたことも、もしかするとそうであったのではないか思われました。それも確かなことではないので、いぶかしく思いながらもそのまま終わりました。

◎古今書聞集：かの侍が首領らしき男の後をつけ、検非違使（平安時代の警察）邸に逃げ込んだことを、別当（平安時代の警察の長）に報告した。大納言殿という身分の高い女の部屋から、血の付いた小袖や、裾に緋色（の括り緒のついた指貫袴など）が出てきた。女は夜ごと仮面をつけ強盗を働いていたことがわかった。検非違使は白屋に入獄させた。見物人は二十七、八の女の容姿の美しさに感嘆の声を上げた。

◎今昔物語集では、盗賊の女首領は逃げおうせたが、古今著聞集の盗賊の女首領は獄につながれた。長い平安時代の間には、盗賊の女首領というような話がいくつかあったのかもしれない。著者の先生は、群盗は、盗みを肯定してためらうことのない悪の集団の所業。武器をもって襲撃し、犠牲者も出たという、プロの窃盗団である。女は強盗の首領の娘に生まれついた者だったのではないか、という。

◎20代30代の美しい女が、男装して盗賊団の首領を務めるというような話、筆の立つものなら飛びつきたくなる話題、説話にしる小説にしる、上手い筆さばきが透けて見える。芥川龍之介が今昔物語集の中からいくつかの説話をいただき、小説に仕上げている。女盗賊の話もいただいておられるらしいが、どなたかが“駄作”と言われたような、なので読む気もしない。小説にしる絵画にしる、「あの作家は アカン」「あいつは 人間性に欠ける」なんて風評を聞くと、「ええい 見まい 聞くまい・・・」となってくる。

小林安治著<平安京の仰天逸話：エピソード>

◎“おぞましき愛執の光景”という表題。徳の高い僧侶、悟りきった聖人が狂ってしまう話。「あれれ これは前のと 違うぞ・・・」今回の話は金剛山にいる靈験あらたかな聖人。もう一つは、増賀聖人の話であった。二つの話、高僧なり聖人と言われ敬われている僧侶が、卑猥な言葉、ババたれ、愛欲、こんなことに走れば、おおいに喝采である。オレ自身がこんなことをする勇気がない分、ワクワクする。気持ちの太い男、まわりを憚らない男、人がおおいに認める男、そうでない自分を顧みてエールを送っている。

◎巻二十第七話<染殿后 天宮のために嬖乱せらるる語：<この話も好きな話です。聖人が死んでも、鬼となっても、あの女との愛欲の思いを遂げたい、とはすごい。>

◎藤原明子は清和天皇の母で、染殿と呼ばれていた。容姿の美しい方であったが、いつも物の怪に悩んでいた。金剛山に靈験あらたかな聖人がいるということで、天皇と関白が迎えの使者を出した。聖人は拒否したが、宣旨には背けず参上し、後の加持を始めた。一匹の老狐が飛び出し後の病は治まった。父の関白はいたく喜び、聖人にしばらく留まるように言った。夏の折、几帳が風でなびき、聖人は、単衣の後の姿を垣間見てから、その美しさに目がくらみ、肝も砕け、とりこになり、深い愛欲の心を抱いた。ついにある時聖人は、御帳のうちに臥せる後の腰に抱きついたが、取り押さえられた。天皇がいたくご立腹になり、聖人を牢屋につながせた。山に返された聖人は、「鬼になって 后を わがものに してやる」宣言して餓死した。たちまち、聖人は鬼になった。裸でおかっぱ頭、身の丈八尺、肌は漆のように黒く、目は碗(かなまり金属の碗)、口は上下の牙が出ている、赤禪に、槌をさしている。その鬼が後の御帳の傍らに現れた。后も笑みを浮かべ二人で身を横たえた。ここから先は、古文のポルノである、愛欲の、情交のさまが描かれている。

◎死を賭して、「あの女と 情交を交わしたい」猪突猛進、何も聞き入れず、「女 女 女」こういう情熱がある奴はすごい。こんなすごい奴の存在を聞いたことはある。犯罪者や不道德者、人の風上にも置けぬやつ、世間の風当たりは強い。でもいるねえ、こんな奴、それこそオレと比べると月とスッポン、うらやましい限りである。「太い男」これこそいつも夢想するだけ、オレはなれない。

◎地位と名誉と金。コネと係累とパワー。社会はこんなもので成り立っている、人はこんなものが欲しくて、手に入れたくて、より上へ、よりたくさん、ともがいている。一つでも在ればいい、一つでも欲しい、ともがいている。何一つ持たないオレは、「一つでもいいから くれ」「慰めて 敬って 欲して」とぼやいている。

◎巻十二第三十三話<多武峰（桜井市：とうとみね）増賀聖人：めちゃくちゃな発言、行動、オレも、こんなことを堂々とやってみたい、人のことなど気にせず好き放題にしてみたい。>

◎円融天皇の皇后、藤原道子は天皇の寵愛を受けていたが、歳をとったので出家しようと思いついた。多武峰に籠る尊い僧に髪を切ってもらおうと使いをやった。相賀は、「参上しよう」

◎増賀聖人の人となり記されている。幼少からすごい子供で、十歳で比叡山に登った。堅固な求道心が生じ、名声欲望を捨て、朝廷のお召しも断り、多武峰に籠居した。修行はするが、奇行も目立った。ますます評判が立ってきた。冷泉院も相賀を召して、護持僧にしようとしたが、気狂いじみたことを申し上げ逃げ去った。

◎髪を切った後で皇后に、「なぜ 相賀を召しだし 髪を切らせた」「拙僧の イチモツが大きいと 期待されたか」「慰んでみたいと お呼びいただいたかもしれないが 今はふにゃふにゃ・・・使い物にならん」これを聞いて周囲も者たちは、ほか～ん、茫然自失、僧や高官たちも冷や汗・・・。「いやあ～ 体調が悪い ごめん」ケツを出して下痢便を庭に、びしゃ～。まわりの者、びっくりするやら笑うやら、臭い臭い・・・。